

『毛主席詩詞』の『批注』について

塩見, 敦郎
花園大学 : 講師

<https://doi.org/10.15017/9793>

出版情報 : 中国文学論集. 6, pp.76-82, 1977-05-25. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

『毛主席詩詞』の『批注』について

塩 見 敦 郎

一九七六年九月九日、毛沢東主席の死がもたらした衝撃は、私にとてもすさまじいものがあった。その余波は、日を遂ってむしろ深まりつつあり、いづれの日にそれを克服しうるか、孜々としてつとめるしかない。

毛沢東主席については、これまでさまざまな議論が、国際的にもさまざまな方面、分野からなされてきた。他は別に問うとして、私は、その人と詩は、中国文学史において、類のない、卓絶した思想、構想、表現をもつ詩人であり、その作品である、と考えている。「毛主席詩詞」中、冒頭の「沁園春、長沙」は、青春文学というジャンルがあるとすれば、その最高に位置する青春文学と評価されている。

一、「批注」について

ここに紹介するのは、「毛主席の自作の詩詞にたいする批注」といわれる文献である。

一九六六年、中国プロレタリア文化大革命が始まって以来、私は北京にあって内外の動向に関心を向ける一方で、「毛主席詩詞」

を読んでいた。さまざまな注釈や解説があるなかで、私はここで紹介する「批注」があるのを知った。私が筆写したのが二本ある。いづれもガリ版などで、文、文字に多少の異同があるが、それは転写されるなかで誤写されたものであろう。帰国を前にした一九六七年一月、ある中国の友人から、記念として「毛主席詩詞」と題するポケット版の真紅の書をもたらした。ここではこの書を主とし、筆写本を従とした。筆写本との文、文字の異同の注意すべきものは、各段落ごとに注記した。しかしポケット本中において編者注として、異本の紹介と校訂がおこなわれており、筆写本にその異本に類する異同があることは、ここではいちいち触れなかった。

この「批注」の真疑は、すでに公表された「毛沢東全集」の刊行の完成を待たない。さらに、「批注」と異なる読み方があったとしても、作品が読者に手渡ったかぎり、読者の読み方であれこれ干渉できるものでもない。たとえば、「清平楽、六盤山」の「蒼龍」が何を指すかについて、ふつうは「日本帝国主義」と解されているが、「批注」では明確に「蔣介石」と指摘されている。すでに「九一八」「柳条溝」事変が起って日本帝国主義の中国への侵略の

牙がむき出しとなり、民衆の熾烈な抗日運動が各地で展開され、しかもこの翌一九三六年には「西安事変」と、抗日が中国人民の統一した強烈な意志となる時期である。前後するが「批注」は一九五八年に書かれている。すでに中国革命にたいして、一定の評価が下されていたであろう時に「日本帝国主義」でないという指摘は興味深い、読者はそれを「日本帝国主義」と読んでいいし、何かを象徴させた「蒼龍」と読んでもいいのである。

ただ、私自身の経験からすれば、この「批注」にもとづく読み方がなによりもしくりくること、また「毛主席詩詞」を読み返すなかでのいくつかの疑問に適切に添えてくる、といえる。この稿は「批注」の紹介にとどめるが、誌面を借りて改めて「毛主席詩詞」を読んでいきたいと思う。

訳、その他資料については、京都大学人文科学研究所の竹内実教授の教示をうけた。また「毛主席詩詞」の底本は、一九七六年五月北京出版によった。

二、「批注」の原文及び訳、注

以下、段落ごとに原文に訳と注をつけておく。流布本との校訂は編者注として（ ）で示されているが、流布本の原文は訳のなかでしめし、原文では編者注は省略した。なお、文字は中国簡字を使いたいが、誤植をおそれて日本漢字に改めた。

毛主席對所作詩詞の批注

我的幾首歪詞、發表以後、注家蜂起、全是好心、一部分說對了、一部分說的不对、我有說明的責任。

一九五八年十二月在広州、見文物出版社九月刊本、天頭甚寬、因

而写下了下面一些字、謝注家兼謝讀者。

魯迅一九二七年在広州、修改他的「唐宋伝奇集」、後記中說道、「時大夜弥天、壁月澄照、鬻蚊遙嘆、予在広州」。從那時起、到今年三十一年了、大陸上的蚊威得差不多、当然革命尚未全成、同志仍須努力、港台一帶、鬻蚊尚多、西方世界、鬻蚊成陣。安得起全世界各民族千百万愚公、用他們自己的移山辦法、把蚊陣一掃而空。豈不偉哉！試仿陸放翁曰、人類今天上太空、但悲不見五洲同。愚公尽掃鬻蚊日、公祭無忘告馬翁。

毛主席の自作詩詞にたいする批注（一九五八年十二月二十一日）

私の幾首かのつまらぬ詞が發表されて以来、注家が蜂起した。すべて好意にあふれているが、あるものは正しいし、あるものは間違っている。私は説明する責任がある。

一九五八年十二月、広州にいる時、文物出版社が九月に出版した本を見たが、天の部分が広かったので、つぎのような少しばかりの文字を連ねて、注家に謝し、読者に謝したい。

魯迅は一九二七年広州にある時、自分の「唐宋伝奇集」（別本には「古小説鈞述」ともいう）の校訂の後記に、「時に大夜、天に弥ち、壁月澄照せり、鬻蚊遙かに嘆ず、余は広州に在り」と記した。

（別本に「於是雲海沈々、星月澄碧、鬻蚊遙嘆、予在広州」とする。われわれが魯迅先生の著作を調べたところによると、魯迅先生は一九二七年、その「唐宋伝奇集」を校訂し、「序例」を書いた。その末尾に題している、「中華民國十有六年九月十日、魯迅校畢題記。時大夜弥天、壁月澄照、鬻蚊遙嘆、余在広州」。したがってわれわれは別本の説は誤伝であろうと考える——編者。その時以来、今年は

三十一年になる。大陸の蚊はほとんど滅すことができた。もとより革命はいまだ完全に成ったわけではなく、同志はさらに努めなければならぬ。^(注四)香港、台湾の一带にはなお蚊が多く、西方の世界では蚊が陣を成している。なんとかして、全世界各民族の千百万の愚公が、自分ら自身の山を移す方法で、かの蚊の陣をまったく一掃したいものである。豈、偉ならざらん哉！

ころみに陸放翁に仿つていう。

人類今日太空中に上る、ただ悲しむ、五州の同じきを見ざるを。愚公、尽ごとく蚊を掃するの日、公祭して馬翁に告ぐるを忘るなかれ。

注一 一九五七年一月二十五日出版の『詩刊』創刊号（文革で停刊、一九七六年より再刊されている）に発表された。

注二 『詩刊』創刊号で発表されたのは十八首であったが、翌一九五八年一月『蝶恋花・答李淑一』、十月に『七律二首・送瘟神』が公表され、文物出版社から『毛主席詩詞二十一首』が出版された。

注三 魯迅は一九二七年一月より同年九月末まで広州にいた。
『唐宋伝奇集』については、『魯迅日記』一九二七年九月十日にも「旧曆仲秋。晴。午後、陳延進が来る、写真を一葉贈る。夜『唐宋伝奇集』の編集をほぼ終え、序例を記しおえる」とある。

注四 孫文の遺囑をふまえている。

注五 陸放翁の詩とは「示兒」で「死去元知万事空、但非不見九州同。王師北定中原日、家祭無忘告乃翁。」薛世の詩である。詩中「馬翁」はマルクス「馬克思」を指す。

なお「蚊」は「呂氏春秋」にある「有盲無身、食人未啗、害及其身」という言葉から魯迅が造った新語であろう。

『沁園春・長沙』

撃水：遊泳。那時初学、盛夏水漲、几死者數、數人終于堅持直到隆冬猶在江中。當時有一篇詩 都忘記了、只記得兩句：自信人生二百年、會当撃水三千里。

訳 撃水は遊泳のこと。^(注一)そのころは学びはじめたばかりで、盛夏に水かさが増すと、しばしば溺れ死にそうになった。^(注二)それでも幾人かは堅持して隆冬になってもまだ江中で泳いだ。当時詩を一篇ものにしたが、すっかり忘れた。ただ次の二句だけおぼえている。

自ら信ず人生二百年、まさに撃水三千里たるべし。^(注三)

注一 「舟を漕ぐ」の解釈に対してであろう。英訳では「We struck the waters」(一九七六年北京外文出版社)となっている。ちょっと理解しにくい。なお毛主席と水泳については『毛沢東同志の初期革命活動』李銳(中国青年出版社 一九五七年)に詳しい。

注二 原文は「凡死者數」となっていたが、筆写本と竹内先生の指摘によって「凡死者數」と改めた。

注三 同一詩句が「毛沢東文化大革命を語る」(現代評論社、一九七四年)二六六頁に見える。

『菩薩蛮・黄鶴楼』

心潮：一九二七年、大革命失敗前夕、心情愴涼、一時不知如何是好、這是那年春季。夏季八月七日、党的緊急會議、決定武装斗争、從此找到了出路。

心潮：一九二七年大革命失敗の前夜で、^(注一)心情は愴涼、しばらくはどうしてよいかわからなかったが、それがこの年の春である。夏の八月七日、党的緊急會議は武装斗争を決定し、これより出路を見出したのである。

注一 一九二六年、広州に開始された北伐戦争は、翌年四月十二日、上海における蔣介石の反革命クーデターによって終りを告げた。この「批注」は当時の毛主席の心情を痛切に描いている。

『清平楽・会昌』

踏遍青山人未老：一九三四年、形勢危急、準備长征、心情又是鬱悶的。這首「清平楽」同前面那首「菩薩蛮」一樣、表露了同一的心境。

青山を踏遍して人いまだ老いず。一九三四年、形勢は危急で、长征がはじまるうとしていたが、心情はまたも鬱悶たるものがあつた。この「清平楽」は、まえの「菩薩蛮」と同様、同一の心境を表現したものである。

注一：ここにおける「菩薩蛮」は「黃鶴樓」を指す。現在公表されている順序からいへば「菩薩蛮・大柏地」（一九三三年夏）、「清平楽・会昌」（一九三四年夏）、「憶秦娥・娄山関」（一九三五年二月）となっているが、發表された時は、日付が入らず、「如夢令・元旦」、「清平楽・会昌」、「菩薩蛮・大柏地」の排列であつた。

『憶秦娥・娄山関』

万里长征、千迴百折、順利少於困難不知多少倍、心情是沈鬱的。過了岷山、豁然開朗、轉到了反面、柳暗花明又一村了。以下諸篇反映了這一種心情。

万里の长征は迂余曲折し、困難は順調さの何倍か、はかり知れず、心情は沈鬱としていた。岷山を過ぎると豁然と明るく開けて、反面に転じた。柳暗花明また一村(注一)というわけである。以下の諸篇はこうした心情を反映している。

注一：陸遊（放翁）の七律「遊山西村」に「山重水複疑無路、柳暗花明又一村」とある。

『七律・长征』

水拍：改浪拍。這是一位不相識的朋友建議改的。他說一篇內不要有兩個浪字、是可以的。

三軍：紅軍一方面軍、二方面軍、四方面軍。不是海陸空三軍、也不是古代晋国所作上軍、中軍、下軍的三軍。

水拍：浪拍を改めた。これはある見知らぬ友人の提案によって改めたのである。かれがいうには、一篇の詩に浪の字は二つはいらないだろう、と。たしかにそうである。

三軍：紅軍第一方面軍、第二方面軍、第四方面軍のこと。海陸空の三軍でもなく、古代晋国にあつた上軍、中軍、下軍の三軍でもない。

『念奴嬌・昆侖』

昆侖：主題思想是反对帝国主義、不是別的。改一句、一截留中国、改爲一截還東国、忘記了日本人民是不对的、這樣英、美、日都涉及了。别的解釈不合實際。

昆侖：テーマとなる思想は帝国主義反対であつて、それ以外のものではない。一句を改める。「一截を中国に留めん」を「一截を東国に還さん」と改めるが、(注一)日本人民を忘れるのは間違つており、こうしてイギリス、アメリカ、日本とすべてに涉ることができたのである。そのほかの解釈は實際とそぐわない。

注一：一九五七年、『詩刊』に発表された時は「留中国」である。一九六三年十一月出版本では「還東國」と改められている。

『清平樂・六盤山』

蒼龍：指蔣介石、不是日本人、因為當時全付精神要對付的是蔣介石。
日。

訳、蔣介石を指すのであって、日本人をではない。なぜなら當時、全精神をかたむけて対決しなければならなかったのは、蔣介石であって、日本ではなかった。

『沁園春・雪』

雪：反封建主義、批判二千年封建主義的一個反動側面。

文采、風騷、大雕、只能如此、須知這是写詩啊、難道可以謾罵這一些人們？別的解釈是錯誤的。

末三句、是指無產階級。

訳 雪：反封建主義である。二千年にわたる封建主義の反動の側面を批判するのである。

文采、風騷、大雕は、こうするしかないものであって、これは詩を書いたのであることを知ってほしい。これらの人々をでたらめに罵ってよいだろうか？このほかの解釈は誤りである。

末の三句は、プロレタリア階級を指している。

『七律・和柳亞子先生』

三十一年：一九一九年離開北京、一九四九年還北京。

旧国之国、都城、不是 Capital、也不是 Country。

訳、三十一年。一九一九年に北京を離れ、一九四九年に北京に返った。

「旧国」の国は都城のことで、Capital（別本 Land に作る——編者）でも Country でもない。（また、State（国家）でも、Town（都市）でもない）とする書もある——編者）。

『浣溪沙・和柳亞子先生』

奏奏：這里設置為奏樂、應改。

訳、奏奏：ここでは奏樂と置きまちがえられている。^(注一)改めるべきである。現在の書ではすでに改められている——編者。

注一：筆写本では「誤置」が「誤植」となっている。

『水調歌頭・游泳』

長沙水：民謡：「常德德山山有德、長沙沙水水無沙」。所謂長沙水、地在常德東、有個有名的白沙井。

武昌魚：三國孫皓一度從京口（鎮江）遷都武昌、官僚、紳士、地主及其他富裕階層不悅、反對遷都、選作口号云：「寧飲揚州水、不食武昌魚」。那時的揚州人心情如此、現在改變了。武昌魚是頗有味道的。

長沙水。民謡に「常德の徳山は山に徳があり、長沙の沙水は水に沙がない」という（別本に「常德は、山々に徳があり、長沙は水々に沙がない」という——編者）。
いわゆる長沙水とは、常德の東

の地にあり、有名な白沙水がある。

武昌魚。三国時代、呉の孫皓（別本では「孫權」とする。三国志・呉書・陸凱伝）に、「孫皓は都を建業から武昌（鄂城）に遷そうとしたが、時の童謡は「建業の水を飲んでも、武昌の魚は喰わない。建業に返って死んでも、武昌にはおりたくない」と唄った」とある。したがってわれわれは別本の説は誤伝であろうとかがえる。

——編者）は、ひとたびは京口（鎮江）から都を武昌に選したが、官僚や紳士、地主、その他の富裕な階層は悦ばず、遷都に反対してスローガンをつくった。「揚州の水を飲むとも、武昌の魚は喰らうまい」と。その頃の揚州人の心情はこんなものであったが、現在は改たまっている。武昌の魚はすこぶる美味である。

『蝶恋花・答李淑一』

蝶恋花：上下両韻不可改、只得任之。

蝶恋花。上下の二韻は改められないので、このままにしておくよりほかはない。

三、『批注』をどう読むか

『毛主席詩詞』はその公表以来、また新たに公表されるにつれて、「注家が蜂起し」、それにもなって各詩への解釈、解説もおこなわれている。

中国に於ては、毛主席の詩詞は、とりわけプロレタリア文化大革命以来、詳細な注釈を必要とせず、単なる観賞の対象としての文学作品から、人民大衆が、自己自身を表現する手段として、ほとんど自由に各詩句を使いこなしているかに思われる。いわば、各詩句は人民大衆のなかで生命を与えられ、独り歩きをしているといえるの

である。

その過程では多くの注釈者の努力や文芸活動者の多采な普及活動があった。詩詞が盛んに歌われるのは、それが歌曲としてであるとしても、中国の古来の伝統を踏まえているのであり、人々が日常口ずさむ曲には、絶唱と感嘆するものが多い。

この『批注』も、文化大革命を機に広範に読まれたものと思われる。『批注』自体は公刊はされていないが、最近「四人組」事件で問題とされた英訳本にしても、この『批注』は生かされている。

以下、『批注』にもとづいて、二、三とりわけ注目される詩詞にふれておきたい。

一、『菩薩蛮・黄鹤楼』

この詩において、私は「茫茫」「沈沈」「烟雨莽蒼蒼」という言葉の表わす重さが気になって仕方がなかった。一九二七年は中国革命の歴史にとって重大な転換が行われた年である。これまでの第一次国共合作が、蒋介石の白色テロと陳独秀らの右翼日和見主義によって決定に破綻し、反革命のなすがままの状態が続き、中国共産党員は五万人から一万人にまで減った。四月十二日から五月十七日の長沙における反革命テロ、七月十五日の武漢政府反共決議と、後退しつづけた中共は、八月七日になって緊急会議を開いて武装闘争を決定し、秋收峰起へと新たな展開を見せる。この期の武漢にいて、しかも中共の指導の一角にあった主席が、当時を回想して、「心情愴涼、一時不知如何好」と吐露せざるをえなかった心情が、この詞ににじみ出ているのがうかがえるのであるまいか。

それは、現在公表されている詩の『七律・長征』までの詩及び『清平樂・会昌』、『憶秦娥・娄山関』にたいする『批注』にもう

かがわれる。この期間の詩詞は、冴えかえった、ときずまされた感覚がうかがえる。うたわれる季節は秋が多く、好んで「蒼」¹「寥郭」の文字が使われている。一九六二年に発表された六首を含めて見ても、「秋風勁」「寥郭江天万里霜」「重疊」²、「國際悲歌」「狂瀾為我從天落」³（「從汀州向長沙」）⁴、「鬱々愨々」⁵（「會昌」）⁶、「蒼山如海、殘陽如血」⁷（「秦山園」）⁸等の表現の重さには、中国革命の展開と複雑にからみあった中共内部の事情と主席の立場が、反映されているといえよう。一九三五年一月の遵義會議がもたらした影響の大きさは、詩作においても大きな飛躍をもたらしている。

二、「念奴嬌・昆命」

構想の雄大さと題材のスケールの大きさでは、「沁園春・雪」に比肩する詩である。注で触れたが、一九五七年発表当時は「一截留中国」であったのが、現行本では「一截還東国」に改められている。諸注家は「東国」をアジア諸国と解しているが、私は「批注」の明示するとおり、「東国」を「日本」を指すと解してこそ、「批注」の「反帝國主義」の主意が理解され、なによりもこの詞に芯が通ると考える。

かつて、英、米、日本は中国侵略の急先鋒をつとめた帝國主義であった。さらに一九五八年は、二年後の日米安全保障条約にたいする日本の「反安保」闘争に見られるように、アメリカ帝國主義およびその従属国が世界のあちこちで力をふるっていた。この時期における改作は、この詞をつらぬく楽天主義が、雄大であればあるほど、日本人としてのわれわれにとって、かつての日本帝國主義、日中戦争のかけがえすしりと重みを増し、一九五八年および現在の日本の対中国関係が重要な意味をもってくるのである。私はこの改作から、

毛主席及び中国の見事なプロレタリア國際主義の精神を感じとる。この詞は、一九五八年の改作以後は、新たに創作された、とすらいえるであろう。

三、「沁園春・雪」

この詩は、公表が劇的であり、詩としての水準も卓抜であるだけに、その評価も毀譽褒貶が甚だしい。その愚の最たる表現が、自らを秦始皇、漢武帝、唐宗宋祖、成吉思汗と比している、というものである。

「只能如此、須知這是写詩啊」との「批注」の表現は、これは詩としての描写であることを踏まえなければ、詩の真意が理解されないことを、切実に表現している。

さらに、「難道可以謾罵這些人罵？」の一節は、訳しにくいのが、歴史にたいする謙虚さが読みとられる。私はここに、単なる詩人ではなく、歴史の創造者としての自覚が、詩として昇華されていることが理解されなければならない、と思う。

以上、ここでは「批注」の紹介を中心にしており、「毛主席詩詞」のものにはふれなかった。注解については「毛沢東 その詩と人生」⁹（武田泰淳 竹内実考）は詳細をきわめており、その他多くの労作がある。いづれにせよ「毛主席詩詞」は「毛沢東選集」とともに、中国革命を理解するうえでも重要な意味をもっており、単に文学作品としてばかりでなく、日本でさらに読まれていいと思う。日本の歴史と方向、毛沢東なき後の中国を理解するためにも、一層真剣な研究と解説が進められる必要を感じる。